

とある超値の未元物質

乙乙乙乙乙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元の世界から捨てられた主人公は、神々の遊びによって垣根 帝督の姿形と能力を手に入れ別の世界に転生した。しかし、転生先は、まさかの緋弾のアリアの世界だった!! 「聞いてねーぞハゲええええええええ!!」作者の初作品です。ヒロインはジャンヌにする予定です。 TINAMIからの移転です。

目次

キャツシユカードはご勘弁	1
とりま地図を下さい	11
やっぱりの名前	16
銃はやっぱり怖いもの	23
アリアのターン!!	32
落下&キャラクター紹介	54

キヤツシユカードはご勘弁

「え？…なにこれ？」

洗面所の鏡に写っていたのはいつものぼくの顔ではなくホストのようなイケメンだった。

「つてこれ、垣根帝督じゃん…」

そう、鏡に写っていたのはとある魔術の禁書目録に登場しわずか一巻でお役御免になつてしまうあの、垣根帝督だった。

ちなみに結構お気に入りキャラだったりする。

だつて冷蔵庫だよ？（笑）

「おゝ起きたか」

「っ!!」

突然頭に響いてきた声に思わず後ずさる、、（パキッ）

パキッ？

そこには無残な姿のキャッシュカード

「グボアっ!!」

思わず吐血

「おれの、俺のキャッシュカードおおおお!!!」

なんだよ！なんだってんだよ！この不幸！！

なんでこんなところにキャツシユカードがあるんだよ！！

「あ、ワシが置いた」

.....

「…テヘペロ♪」

「おもてでろやごるああああ！！！！」

「このジジイぜったいぶつ殺す！！」

「ま、まあ待て。そう怒るな。今からおまえに起こったことを説明するから、な、な？」

ふう、

いつかい落ち着くとするか

って落ち着けるか!!

「死いいねええ!!!」

「ボゲラツ!!」

お、てきとーに振り回した手がなんか当たった。

「なんでお主はわしの居場所がわかったんじゃ!?!」

「おれの適当に常識は通用しねえ!!」

「なんてやつじゃ…」

なんかジジイがぼやいているが気にしない。

「つておまえどこから出てきやがった!!」

いや、やつぱり気になる

だれ?こいつ?

「いやはや、紹介が遅れたのう。」

聞いて敬え!見て拝め!でおなじみ、神じゃ!」

.....

「あ、もしもし、総合病院ですか?どうしようもない厨二病患者がいるんですけど」

「まてまてまてーい!!わしはどこもおかしくないぞい!!」

「そーゆーやつほどいつちやってんだよ!!」

「じゃあ証拠をみせるぞ？」

ほれっ!!」

消えた? ふむふむ

おらっ!!

「ブゴッ!!」

「あれー☒神様☒なに? この様?」

「ど、どうして…」

「いや、そこら中に未元物質撒いたら居場所わかつちやった☆」

「なんてやつじゃ…」

まあ良い、そんなことより説明じゃ。いいか、お主は元の世界からはじき出された。」

えっ?まじ?!

「そしてこの世界で垣根提督の姿形と能力をもつて生まれ変わったわけじゃ。」

「えーと?なんでなん?」

動揺でなんか関西弁が…

「簡単にいうとな?お主、欲が強すぎたんじゃ」

「はっ?」

「要は、元の世界にいたくないという思いが強すぎてもとの世界から捨てられたんじゃ
よ」

はあ、つてことは…

「おれもこの世界に戻れないの？」

「まつ、そーゆーことじゃな」

まじか、まーいーけど

とくに未練もないしね

「お主、意外と落ち着いておるのお？」

「まあ身内もいなけりや未練もないしな、こちとら願ったり叶ったりさ」

あいつさえいなけりやあな…

「まあよい、ということでお主には今日からここで生活してもらおうわけじゃが、ほれ、これをやろう」

といつて渡されたのは…拳銃？

とりま地図を下さい

今日は武偵校の入学式らしい

それはいいんだが…

「家出てきたはいいが行き方知らねー、
ってかよく考えてみればなんでおれこんなおいしい状況になってんだろ？」

「その疑問にはワシがお答えしよう!!」

でたよ…てか復活はやいな

「神の回復力を舐めるでない!」

まあそんなことはどーでもいいんだけど？
んで？なんでおれここにいられんの？

「それはのお、、、 きまぐれじゃ!!」

「その回答をぶち殺す!!」

「ソゲブツ!!」

もう一度どうぞ、 神様

「それはのお以下略…」

「神を二回も殴るなんて!! 父さんにも殴られたことないのに!!」

「そのボケを以下略…」

ほっぺを真つ赤に腫らした神様が続ける。

「まあよい、簡潔にいうとな、暇だったんじゃ」

はっ？

「あのくあれじゃ、ほら」

「暇を持て余した神々の遊び」ってやつじゃ」

なんか理由がすくすくし気に障るがまあいい、なんせそのおかげでおれはここにいられるんだからな

「あと2、3人おなじようなやつがいるぞい」

へー、ま、どーでもいいーけど

「そんで？武偵校にはどーやっていけばいいんだ？」

「知らん」

「その回答をぶち殺す!!」

「ブベラッ」

本日4度目のそげぶ

「さつき答えるって言っただろ!!」

「悪いの、ああは言ったが実はわし、知らんのじや。適当にどーにかしてくれー。それじゃっ眠いのでばーい」

「おいつちよつとまで、おーい!!」

はい、神様消えました。

さーてどーしよう？

やっぱりあの名前

うーん、どーしよっかなー

そーいやーおれって名前なんなんだろう？元の世界通り、一
にのまえ

ー
はじめ

なのかな？あの名前嫌いなんだよねー、いじめの原因でもあるし、

「残念じゃが、この世界でもその名前じゃ、悪いの〜」

なんか頭の中に響く声、こんなこともできんのか、神様

「少しは見直したか？」

全然、それどころか最初から何でそうしなかったんだと逆に神様の頭を心配しちゃうんだが…

まーいや、とりあえず武偵校に行かないと

あつ、携帯発見♪これで行き方を調べてと…

お、出た

やべつちよつと遅刻気味じゃん

急ぐとするか、せつかくだし飛んで行ってみようかな？

神様くそれって問題ないの？

「原作はぶつ壊してもらって全然オツケーじゃ！

むしろそのための遊びじゃからな」

よーしじやあいっちよ行きますか、能力を行使、羽の形に未元物質を固定、move
よしっ浮いた、あとはこのまま…

いい気持ちですなー空を飛ぶって、ん？あれなんだ？チャリがものすごい速度で走つ
てるだけ…あ！あれキンジか！よーし早速原作に介入してやるぜ！！

.....

ということで…

どうしてこうなった!!

あれだよ! ぼくは二人の出会いを邪魔してやろうと思ってキンジの横を並走してたセグウェイをそげぶしただけなんだよ!!

なのになんであの2人は校庭で絡み合って倒れてんの!?

まあ、爆発の余波でキンジが吹っ飛んで、飛んできたアリアにぶつかったんだけどね

♪?

え? 原因おまえじゃねーかって?

安心しろ、おれの未元物質に常識は通用しねえ!!

意味わかんないわ! って?

大丈夫だ、おれもだから

そんなことはどーでもいい

キンジたち、しんでないよね？

主人公補正きくよね？

「ううん…」

あ、キンジ起きた。じゃあちよつとこのあとどうなるか傍観させていただきますかね
ちなみに今おれは校庭の生垣に隠れてたりする。

キンジ s i d e

並走してたセグウェイが突然爆発して、チャリの爆弾の問題はなくなったわけだが…

イタタタ、

ん？

「って、げっ!!」

眼下には、なんだかちっこ可愛い女の子、やばい、これはやばい

慌てて退こうと思ったら、手が引つかかって女の子の服がずれあがった。

そこには…65A↓B

よ、寄せてあげるブラ、だと…!!

「う…ううん…え?って、ちよつとあんた!!なにしてんのよ!」

女の子がなにか叫んでいるが、…、まずいな

おれはなつてしまったようだ、あのモードに

これぐらいじゃならないとおもったんだが…自分であげちまったのがダメだったか

…

ドクンドクンツ

体の中心に血が集まる感覚

頑張つてこのモードにならないようにしてたんだがな…

まあそれはいい、まずはあいつらをどうにかしなきゃいけないみたいだ、

キンジが目を向けた先には

7台のセグウェイが迫ってきていた

銃はやっぱり怖いもの

ハジメサイド

キンジたちに7台のセグウェイが迫っていた。

(…まずい、…原作では最初の掃射を跳び箱で防いでたけど、ここにはなにもない…下手すりゃキンジがアリアの盾になる可能性もある………しょうがない、一肌脱ぐか)

ハジメはキンジのもとに走り寄る

「おまえら!!早くこっちこい!!」

そう叫びつつ、未元物質で壁を構築、自らの前に出現させる。

キンジたちが壁の後ろで身をかがめた刹那…

ズガガガガガガガッツツツ!!!

ウージーから放たれた銃弾が未元物質に弾かれて落ちる。

もちろん、未元物質には傷一つない

「遠山、あとはたのんだぞ。」

「お、おう…。」

遠山は少し戸惑っていたようだが、ベレッタを取り出し壁から飛び出す。

すぐに狙いをキンジにうつすウージー、放たれる銃弾、しかし…

「いい狙いだ。」

セグウェイを片付けたはいいんだが…

「なんなんだ？これ…？」

思わず声が漏れる。突如あの男の前に現れた白い物質は、手触りや見た目がかなりおかしかった。外観は白くのおつべりした感じで、手触りは、吸い付くような、しつとりした感じで強いて言えば油粘土のような雰囲気だった。まるでこの世のものとは思えないような…

ただもつと異様なことにキンジは気づいていた。

「あんなに当たったのに…？」

そう、その物質は、ウーリーの掃射による銃弾をすべて受けたはずなのに傷一つついていなかったんだ。

「どうして…？」

隣ではさつきの子も呆然としている。

「おーい、二人とも大丈夫か〜?」

「ツ!!」

唐突に響いた快活な声に思わず体がこわばる。

この物体の異様さは、キンジたちがハジメを警戒するには十分なものだった。

助けてくれたのだからいい奴なはずだ、そう心に言い聞かせキンジたちは若干の恐怖と戦いつつ2人はこわごわ振り向いた。

一サイド

第一印象が大事だ!!ということのできるだけ元気そうな声で二人に声をかけ

る、……………、が、二人ともまるで鬼を見るかのような顔で振り向いた。

ああ、二人とも未元物質を見て怖がっちゃってんのかー

ま、誤解はさっさととくに限るね♪

「はじめまして、おれはにのまえ はじめ。一応今日から武偵校の2年生だ。…それからさっきの壁のことだが…」

「ッー!」

ここで二人の顔が強張る。

やっぱりあれが怖いんだろーなー

「安心してくれ。おれは超偵なんだ。あれはおれの能力で作り出したものだ。だから、びつくりしたかもしれないが危険性はない。」

こつちの世界の超能力とはちょっと違うものだが、まあ大丈夫だろう。

すると二人とも見るからにホツとした顔で頷いていた。

まあ、人間は得体のしれないものには嫌悪感を示すっていうしな、
どんなものがわかっただけでもかなり心に余裕ができたんだろう。

まあなんにしろ ファーストコンタクトはいい感じかな？勝手に2年生って言っ
ちやったけど……まあ、だいじょうぶだろ。

(大丈夫じゃ)

あ、どうも神様、サンキューな

するとキンジがおもむろに口を開いた。

「おれは遠山キンジ、おれもおんなじ2年生で探偵科

インケスタ

の…Eランクだ。

ところで、……

にのまえだったか？なんでおまえおれの名前知ってたんだ？」

「あ、アアーそれは…入学試験でSランクをとった奴に興味があつて…」

あわてて弁解をする。しまったなあこんなことなら名前なんて呼ぶんじやなかった。てゆうかなんでキンジの口調はあんななんだ？

「ちよつと待て、なんでおまえおれが入試でSランクとつたこと知つて」

るんだ？という言葉をキンジは言い切る事ができなかった。
なぜなら…

バギユン!!バギユン!!

「ちよつとあんたたち!!この私を差し置いてなんで二人だけでしゃべってんのよ!!」

目を向けた先にはちっこいお姫様
アリア

がこちらに銃を向け仁王立ちしていた。

アリアのターン!!

アリアサイド

にのまえとかいう奴が超能力であの壁を作ったって聞いて一瞬安心しちやっただけど
…

やっぱりあの能力はおかしいわ!!

なにもないところから物を作り出すなんて!!もつと話題になつてなきやおかしい。

それにそれにもう一人の遠山つてやつ!!

なんなの、あの技!!

あんなのできるくせにEランクだなんて馬鹿げてる!!

とにかく二人とも要チエック人物だってことは確かだね

もしかしたら探してるパートナーだってことも…

まあ、いまはそんなことはどうでもいいわ!!問題は…

「そのあんた…さっきのこと、うやむやにはさせないわよ!!あれは強制猥褻!!
れっきとした犯罪よ!!」

絶対とつちめてやるんだから!!

キンジサイド

「お嬢さん、それは悲しい誤解だ。あれは不可抗力つてやつだよ。理解して欲しい。」

顔を真っ赤にしながら叫ぶお嬢さんに優しく話しかける。

ああ、やめてくれ、気持ち悪いんだよこの口調。にのまえたって見てるってのに…

「あ、あれが不可抗力ですつて!!　ハ、ハッキリと……………」
あんた……………!!」

お嬢さんはいいながら睨み目になり、真っ赤になっている。

「あ、あたしが気絶してる隙に…………ふ、服をぬ、ぬぬ、脱がそうとしてたじゃないっ!!」

そんなに恥ずかしいなら言わなきやいいのに……

「そ、そそ、それに、む、むむ、むむむ……………」

ババァン!!

わー！うっな！

「胸、見てたあああああ!!これは事実！強狼の現行犯!!」

ぼふつと頭から噴火しそうな勢いで、お嬢さんはさらに赤くなった。耳まで真っ赤だ。

「あんた！いったい！なにをする！つもりだったのよ！せ、せ、責任とりなさいよ!!」

…このお嬢さんは何か勘違いをしているようだ

「よし、お嬢さん、冷静に考えよう。いいか？俺は高校生、それも今日から2年だ。中学生を脱がしたりするわけないだろう？歳が離れすぎだ。だから、、、安心していい」

噛んで含めるように優しく言うと、お嬢さんはわああー！と言う口になって両手を振

り上げた。声が出てないのは絶句しているということらしい。

そして、ギギン！と涙目になって俺を睨みつける

「あたしは中学生じゃない!!

それにあたしはお嬢さんじゃなくてア！リ！ア！」

まずいな。説得しようとしたが歳のことですらに怒らせてしまったらしい。女と
いうやつは実際より年上にみられると怒る習性がある。しかもこの子は凶暴だ。この
ままだとまた撃たれかねない。フォローしておいた方がいいだろう。

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。助けられた時からそ
うかもなとは思っていたんだ。しかしすごいよアリアちゃんは——」

勇敢な子だね、と続けようとした時……今度は、がばつ。アリアが顔を伏せた。顔
の上半分が影になって見えなくなる。そしてバシツと、両太ももに左右の手をついた。
今度はなんだ？忙しい子だな。

「こんなやつ…こんなやつ…助けようとするんじゃないや…なかった!」

バギyunバギyun!!

「うおっ!」

またも撃ち込まれた弾丸におれは青ざめた。いや、マジでやばいつて…

「あ!た!し!は!高!2!だ!!!」

一難去つてまた一難だ。

「ま、まてっ!!」

さらに至近距離から銃を向けてきたアリアに、おれはむしろ飛びかかり、その両腕を両脇に抱え込んで後ろに突き出させた。

バリバリバリっ！ がきんがきんっ！

「うわあ！あぶねえ!!」

なんかあせっているにのまえの声が聞こえたが今はそれどころじゃない。こつちをまずどうにかしないとっ…俺たちはそのまま取っ組み合うような姿勢になった。

「んっ、やあっ！」

くるっ

体をひねったかと思うと、アリアは柔道で言う跳ね腰みたいな技で、体格差を物ともせず俺をなげとばした。

この子、徒手格闘もできるのか？しかもやたら巧い。

かろうじて受け身を取るとおれはその勢いを殺さず、校舎へと走り出した。

「逃げられないわよ！あたしは逃走する犯人を逃がしたことは一度もない！——あ、あれ？あれれ、あれ？」

叫びながら、アリアはスカートの内側をわしやわしやと両手でまさぐった。

弾切れになった拳銃に再装填する弾倉

マガジン

を探しているのだろう。

「いめんよ」

おれはさつき投げられた時にスッとおいた予備弾倉を見せてみせる。

それを見てアリアは無用の長物となつてしまった拳銃を上下にブンブンと振り回し

た。

やったな！やったな！という怒り動作らしい。

「もう！許さない！跪いて泣いて謝っても許さない！」

アリアは拳銃をホルスターにぶち込むとセーラー服の背中に手を突っ込み、ジャキジャキ！

そこに隠していた刀を二刀流で抜いて、なおも逃げ続ける俺に向かって走ってきた。

その直後

「つわおきやつ！！」

勢いよく走ってきたアリアは、新種の山猫みたいな声をあげ、見えない相手にバツクドロップをくらったように、真後ろにぶつ倒れた。

その足元にはアリアの弾倉から抜いて置いた弾丸がいくつも転がっている。

さつき弾倉を見せた時、ばらまいて置いたのだ。

「い、このっ、みきやおっ！」

立ち上がろうとして弾を踏み、また両足が真上を向くぐらい勢いよくこけている。マ
ンがみたいだな。

このすきにおれは、とにかく一目散に逃げることにした。

アリアは常人離れた戦闘力を持っている。だがいまは、怒りと羞恥心で冷静さを欠
いている状態だ。

対する俺は『ヒステリアモード』

たとえば、1000人のFBI捜査官からだって逃げ切れるさ。

そう思いながらおれは、背中で彼女の捨て台詞を聞き流すのだった。

「この卑怯者! でっかい風穴開けてやるんだから!!」

それが俺、遠山キンジと、後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上げさせる鬼武偵、神崎・H・アリアとの……………

硝煙の匂いにまみれた、最低最悪の出会いだった。

アリアサイド

「もー、最悪!!」

セクハラはされるし!

小学生には間違えられるし!!

犯罪者には逃げられるし!!!

ほんとに最悪だわ！

でもまあ、あの遠山つてやつ、いくら気が高ぶっていたとはいえ
あたしから無傷で、しかもあんなに簡単に逃げるなんて……
やつぱりただものじゃないわね……

でも!!

今度あつたらこてんぱんにしてやるんだから！

そう思い、とりあえず校舎に向かおうと、立ち上がり、振り返ると……

そこには地面にへたり込んだ、にのまえがいた。

ハジメサイド

僕は自分が出した未元物質を観察していた。

「へへ、外に出したらこんな風なんだなー」

翼の状態しか見ていなかったし、じっくり観察もしてなかったので、2人の話が終わるまで、ひまを潰そうとしていたわけだ。

だが…

「あー！たー！しー！はー！高ー！2ー！だー！」

という叫び声と、キンジの

「ま、まて!!」

という焦ったような声が聞こえた次の瞬間

バリバリバリッ！ガキンガキンッ！！

銃声が響き、一発の銃弾が、ハジメの頬を、、かすめた。

「うわあ！あぶねえ！！」

思わず叫ぶ。

驚いた拍子に、その場に尻餅をついてしまう。

自分の頬が大丈夫か、何度もさすって確かめる。

なんとか大怪我にはなっていないようだ。ああ、良かった。

その間に、キンジはアリアをうまく撒いて逃げてしまった。

アリアは、キンジの背中に、なにか叫んでいた。

僕はというと、……、

腰を抜かしていた。

いや、だってね!! 考えて見てよ!

今までほとんど引きこもりのように過ごしていた僕が、
頬を銃弾がかするなんていう
ことが起こって、平気でいられるわけないじゃないか!!

するとアリアがこっちに歩み寄ってきた。

あー、まずい

アリアサイド

「あいつ、なにしてんのよ…」

あんなにレベルの高そうな超偵が、あんなことぐらいで動揺するとは思えない。

むしろ、あの弾をよけたんじゃないかと思つたほどなのに…

罨

自分はそこそこ名のある武偵だ。

これは自慢でもなんでもなく、事実である。今まで多くの犯罪者を捕まえて来た。その報復も、今まででなかったといえれば嘘になる。まあ全部撃退してきたけど…もしかして

こいつも…

そんな考えが頭にチラリと浮かんだが、その考えを振り払う。

それなら最初から助けなければいい話だ。あんなに危ない目をして飛び出して、あたしたちの盾になる理由がない。

そう思いアリアは、ハジメの元に歩み寄った。

ハジメサイド

どうする…

ふつうに腰が抜けたなんて言ったら、絶対疑われるだろう。

こんな力を持った超偵が、そんなに弱い訳がない、きつとそう思われてるはずだ。

そして…

ハジメは、
飛び上がった。

落下&キャラクター紹介

アリアサイド

「なんなのよあいつ、お礼の一つぐらい言おうと思ったのに…」

あいつはこっちの方をみようともせずに、飛んで行ってしまった。

つて、飛んで行つた!!

え？飛べるの？あいつ、ほんとに…どんな能力なのよ…

G15はくだらないわね

空を飛べるなんて、世界に数人いるかいないかぐらいなもの。

「あいつもドレイにしくちや…」

アリアは人しれずつぶやくのだった。

一サイド

「また、… やってしまった…」

最悪だ

ほんとに最悪だ。

またやってしまった。

せつかくチャンスを手に入れたのに。

僕は変わらないのか…？

みんなと同じ場所には立てないのか？

何度も自問を繰り返す。

と、その時、

「ひっさしづり〜」

突然背中を思いつきり叩かれた。

その時ぼくは、ビルの屋上にいて、その縁に座っていたわけだ。

だから、背中を叩かれ、よろめいた結果…

タイイキタイカワリタイイキタイカワリタイイキタイ

そんな、

いままででない、

強い、

思いが、

胸に、

うまれた、

その時

ドンッ

体が上からなにかに、抱きしめられた。

そして、身体が浮き上がる感覚のあと

「なにそんなに泣いてんの〜？」

あ！わかった〜私が出来たのが泣くほどうれしかったんでしょ〜？」

そんな、空気の読めてない、

だけど、なんだかとても懐かしいような声が、頭上から聞こえた。

キャラクター紹介

一（にのまえ） 一（ハジメ）

本作の主人公。

体は垣根帝督とは違い、身長は165センチぐらいでちよつと低め。色白の痩せ型で、弱々しい印象を受ける。垣根帝督の顔だが髪は黒髪で、ちよつと長め。目が悪いので普段はコンタクトだが、たまにメガネをかけている。

能力は垣根帝督の未元物質（ダークマター）

転生前はただの一般人のため、銃の扱いどころか、戦闘力すら皆無。しかし、『とある魔術の禁書目録』における垣根帝督の身体能力は受け継いでいるので、訓練すればそれなりに強くなる…はず。

能力の使い方は、最初から知っているが、まだ覚醒はしていないので、天使の力、テレズマは使えない。

もう一つ、神（笑）につけられた力があるが、まだそれには気づいていない。

元の世界では、口下手と、その特徴的な名前からいじめを受けていた。その時の唯一の心の支えがフィンで、かなり依存していた面がある。

親は、小さい頃に蒸発し、祖父母に育てられていたが、中学2年生の時2人とも死去し、それからは、身辺のものを売り払った金と、生活保護で生活していた。

保護者は叔父と叔母になっていたが、仕事と育児が忙しい2人のために、自分から一人暮らしをしたいと申し出た。

一人暮らしが長かったために料理、掃除、洗濯などの家事スキルは極めて高い。特に料理は、インドア派だったこともあり、趣味にもなっていて、いまや、お店で出せるレベルの腕前になっている。

趣味は、料理、ゲーム、読書（主にラノベ）などインドア的なものばかりだが、アウトドア的なものでは、唯一、釣りが好き。

釣った魚をその場で調理して食べるのにはまっていた。

暴力が嫌い、すべてのことについて、メリットデメリットを考えてしまう性格。小さい頃の経験からしやべるのが苦手。でも嫌いではないので、もつとみんなとおしやべりしたいと思っている。

神（笑）

主人公のハジメを転生させた神。

いつも白い良くわからない生地、の服をきている。

世界から捨てられていたハジメを見つけ、せつかくなので、他の世界で、すぐに役目がなくなった垣根帝督の体を持ってきて、魂とリンクさせた。よって、垣根帝督の体に直接刻まれた恐怖は健在である。

そのなをを考えてるかわからない顔（世間ではこれを間抜けヅラと呼ぶ）と、おかしなテンションから、ハジメには、末期の厨二病患者で、なんか転生させてくれた、ぐらゐの認識しかされてない。

神なので、莫大な力を持っているが、なにぶん年なので、存分に力を振るうことができない。

フィンを転生させた悪魔が天敵で、次こそは完全に滅ぼすつもりだった。だが、フィ

ンがぐつちやぐちやの（以下自主規制）にしてしまったので、とりあえずいまは諦める。悪魔の生命力はかなり強いので、多分やられてないと思っっている。

女の子が大好きで、未だ独身のため、嫁を探している。

エマヌエーラ・フィンダイゼン

ハジメの元の世界での幼馴染で、転生者。

両親共にドイツ人で流れるような銀髪とちよつと幼めに見える顔が特徴の女の子。

身長は160センチぐらいで同年代の女の子としては高め。

言葉を伸ばすくせがあり、そのせいで、ひどく会話がゆつくりになる。

能力はアクセラレータのベクトル操作

転生させたのが悪魔のため、望んだ能力を手に入れることができたが、容姿は変わらずに済んだ。

こちらもまだ覚醒前のため、天使の力、テレズマは使えない。

難しい能力のため、まだしつかりとは使いこなせていないのが現状である。

元の世界ではその銀髪と、口調のせいで、人から避けられてきたが、なんの警戒もなく、接してきたハジメに好意を抱く。

その後、ハジメがいじめられている時も、ハジメの心の支えとなった。

小さい頃から、武道を習っており、ボクシング、柔道、空手などの有名なものから、珍しいところではカポエイラなど、あらゆる武道に精通している。

それとは対照的に、料理などの家事スキルは全くなく、まず、したことがない。(すべてハジメに任せっきりだった)

喧嘩っ早い性格だが、いつもハジメに止められる。根は優しい子だが、怒るとすぐ手が出る。大雑把だと思われるが、実は結構器用だったりする。

性的な面ではかなり大胆なところがあり、ハジメはちよつと引き気味。

ハジメが傷つくのをひどく嫌い、ハジメにぶつかってしまった一般人に喧嘩をうったこともある。この性格から、悪魔をコテンパンにしてしまい、神(笑)を驚かせた。

ベリアル

フィンを転生させた悪魔

昔、神に力を封印され、今は身をひそめている。

神のことがめちやくちや嫌いで残っている力でしょつちゆう嫌がらせをしている。

やり方が人間を見下したもので、神はそろそろ滅ぼさなければならぬと思っ
ている。

たまに人間を転生させるが、

この前はうっかりハジメの名前を出してしまったため、フィンにやられてしまった。だが、その生命力でしぶとく生き残っている。

また、悪賢い性格で、転生者には、ある細工をしている。

フィンにも…